

新潮文庫

アメリカひじき
火垂るの墓

野坂昭如著



新潮社

アメリカひじき・火垂るの墓^{はか}

新潮文庫

の - 3 - 3



昭和四十七年一月三十日 発行
昭和六十二年四月十五日 二十七刷改版
平成二年十二月二十日 四十六刷

著 者 野 坂^{さか} 昭^{あき} 如^{ゆき}

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三)二六六―五一
電話 編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替 東京 四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

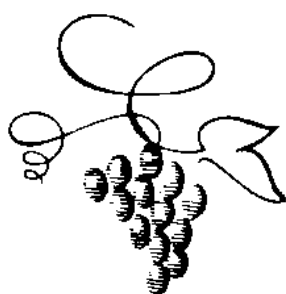
© Akiyuki Nosaka 1968 Printed in Japan

ISBN4-10-111203-7 C0193

新 潮 文 庫

アメリカひじき
火 垂 る の 墓

野 坂 昭 如 著



新 潮 社 版

2047

目次

火垂るの墓	七
アメリカひじき	三九
焼土層	九一
死児を育てる	一二七
ラ・クンパルシート	一四七
プアボーイ	一九二

解説 尾崎秀樹

アメリカひじき・火^ほ垂^たるの墓

火垂るの墓

省線三宮駅構内浜側の、化粧タイル剥げ落ちコンクリートむき出しの柱に、背中まるめてもたれかかり、床に尻をつき、両脚まっすぐ投げ出して、さんざ陽に灼かれ、一月近く体を洗わぬのに、清太の痩せこけた頬の色は、ただ青白く沈んでいて、夜になれば昂ぶる心のおごりか、山賊の如くかがり火焚き声高にのしる男のシルエットをながめ、朝には何事もなかったように学校へ向かうカーキ色に白い風呂敷包みは神戸一中ランドセル背負ったは市立中学、県一親和松蔭山手ともんぺ姿ながら上はセーラー服のその襟の形を見分け、そしてひっきりなしにかたわら通り過ぎる脚の群れの、気づかねばよしふと異臭に眼をおとした者は、あわててとび跳ね清太をさける、清太には眼と鼻の便所へ這いずる力も、すでになかった。

三尺四方の太い柱をまるで母とたのむように、その一柱ずつに浮浪児がすわりこんでいて、彼等が駅へ集まるのは、入ることを許される只一つの場所だからか、常に人込みのあるなつかしさからか、水が飲めるからか気まぐれなおもらいを期待してのことか、九月に入るとすぐに、まず焼けた砂糖水にかしてドラム缶に入れ、コップいっぱい五十銭にはじまった三宮ガード下の闇市、たちまち蒸し芋芋の粉団子握り飯大福焼飯ぜんざい饅頭うどん天どんライスカレーから、ケーキ米麦砂糖てんぷら牛肉ミルク缶詰魚焼酎ウイスキー梨夏みかん、

ゴム長自転車チューブマツチ煙草地下足袋おしめカバー軍隊毛布軍靴軍服半長靴、今朝女房につめさせた麦シヤリアルマイトの弁当箱ごとさし出して「ええ十円、ええ十円」かと思えば、はいている短靴くたびれたのを、片手の指にひっかけてささげ持ち「二十円どや、二十円」ひたすら食物の臭いにひかれてあてもなく迷いこんだ清太、防空壕の中で水につかり色の流れあせた母の遺身の長じゅばん帯半襟腰ひもを、ゴザ一枚ひろげただけの古着商に売りなんとか半月食いつなぎ、つづいてスフの中学制服ゲートル靴が失せ、さすがズボンまではとためらううち、いつしか構内で夜を過ごす習慣となり、疎開から引き揚げて来たらしくまだ頭巾をきちんとたたんでズツクの袋にかけ、背負ったリュックサックには飯ごうやかん鉄かぶと満艦飾の少年と家族連れ、さだめし列車中の非常食に用意したのだろう、糠のむし団子糸ひいたのを、ここまで来れば安心とお荷物捨てるようにくれたり、あるいは復員兵士のお情け、同じ年頃の孫をもつ老婆のあわれみ、いずれも仏様に供えるようにややはなれた所にそつとおく食べ残しのパンおひねりのいり大豆、ありがたく頂戴し、時には駅員に追いつてられたが、改札に立番の補助憲兵逆にこれを張りとはし守ってくれ、水だけはいくらもあるから、居つくと根が生え、半月後に腰が抜けた。

ひどい下痢がつづいて、駅の便所を往復し、一度しゃがむと立ち上るにも脚がよろめき、把手のもげたドアに体押しつけるようにして立ち、歩くには片手で壁をたよる、こうなると風船のしぼむようなもので、やがて柱に背をもたせかけたまま腰を浮かすこともできなくな

り、だが下痢はようしやなく襲いかかって、みるみる尻の周囲を黄色く染め、あわてた清太はむしように恥かしくて、逃げ出すにも体はうごかず、せめてその色をかくそうと、床の上のわずかな砂や埃を掌でかきよせ、上におおい、だが手のとどく範囲はしれたもので、人が見れば飢に気のふれた浮浪児の、みずから垂れ流した糞とたわむれる姿と思ったかも知れぬ。

もはや飢はなく、渴きもない、重たげに首を胸におとしこみ、「わあ、きたない」「死んだんのやろか」「アメリカ軍がもうすぐ来るいうのに恥やで、駅にこんなおったら」耳だけが生きていて、さまざまな物音を聞き分け、そのふいに静まる時が夜、構内を歩く下駄のひびきと、頭上を過ぎる列車の騒音、急に駆け出す靴音、「お母ちゃーん」幼児の声、すぐ近くでぼそぼそしゃべる男の声、駅員の乱暴にバケツをほうり出した音、「今、何日なんやろ」何日なんや、どれくらいたってんやろ、気づくと眼の前にコンクリートの床があつて、だが自分がすわつてゐる時のままの姿でくの字なりに横倒しになったとは気づかず、床のかすかなほこりの、清太の弱い呼吸につれてふるえるのをひたとみつめつつ、何日なんやろな、何日やろかとそれのみ考えつつ、清太は死んだ。

その前日、「戦災孤児等保護対策要綱」の決定された、昭和二十年九月二十一日の深夜で、おっかなびっくり虱だらけの清太の着衣調べた駅員は、腹巻きの中にちいさなドロップの缶をみつけ出し、ふたをあけようとしたが、錆びついているのか動かず「なんやこれ」「ほつとけほつとけ捨てとつたらええねん」「こつちの奴も、もうじきいてまいよるで、眼えボカ

ッとあけてるようになったらあかんわ」むしろもかけられず、区役所から引きとりにくるまでそのままの清太の死体の横の、清太よりさらに幼い浮浪児のうつむいた顔をのぞきこんで一人がいい、ドロップの缶もて余したようにふると、カラカラと鳴り、駅員はモーションつけて駅前の焼跡、すでに夏草しげく生えたあたりの暗がりへほうり投げ、落ちた拍子にそのふたがとれて、白い粉がこぼれ、ちいさい骨のかけらが三つころげ、草に宿っていた蛭おどろいて二、三十あわただしく点滅しながらとびかい、やがて静まる。

白い骨は清太の妹、節子、八月二十二日西宮満池谷横穴防空壕の中で死に、死病の名は急性腸炎とされたが、実は四歳にして足腰立たぬまま、眠るようにみまかったので、兄と同じ栄養失調症による衰弱死。

六月五日神戸はB二九、三百五十機の編隊による空襲を受け、葺合、生田、灘、須磨及び東神戸五カ町村ごとく焼き払われ、中学三年の清太は勤労働員で神戸製鋼所へ通っていたのだが、この日は節電日、御影の浜に近い自宅で待機中を警報発令されたから、裏庭の家庭菜園トマト茄子胡瓜つまみ菜の中に掘った穴に、瀬戸火鉢を埋め、かねての手筈に従い台所の米卵大豆鰹節バター干鰯梅干サッカリン乾燥卵をおさめて土をかけ、病身の母にかわつて節子を背負い、父は海軍大尉で巡洋艦に乗組んだまま音信なく、その第一種正装の姿写真立てからはずして胸に入れ、三月十七日、五月十一日二度にわたる空襲で、とても女子供連れでは焼夷弾消しとめるのは無理、家の床下に掘った壕も頼りにならぬと、まず母を町内会

で設置した消防署裏の、コンクリートで固めたそれへ避難させ、洋服だんす簞笥の中の父の私服、リュックにつめはじめると妙にはなやかな感じでカンカンキンと防空監視哨ぼうくうかんししやうの鐘が交錯して鳴り、玄関にとび出る間もなく落下音に包まれ、第一波がすぎると、その落下音のすさまじさに、ふと静寂がおとずれたような錯覚があったが、ウォンウォンと押えつけるようなB二九の轟音ごうおん切れ目がなく、ふりあおげば、これまではあるかなきほどの点からもくもくと飛行機雲ひいて、東へとぶ姿か、つい五日前大阪空襲の際、大阪湾上空を雲のあいまぬって進む魚のような群れを、工場の防空壕でながめただけ、今は、両手にあまる低空飛行で胴体下部にえがかれた太い線まで識別できる、海から山へむかいつと翼かたむけて西へ消え、ふたたび落下音、急に空氣の密度がたかまったように、体が金しセンチばりとなって立ちすくんでいると、ガラガラと物音がして屋根からころげた青色の、径五糎長センチさ六十糎ばかりの焼夷弾、尺取虫のように道をとびはねつつ油脂をまきちらし、清太はあわてていったん玄関へとびこんだが、家の中からすでに黒煙がゆっくりと流れ出し、ふたたび表へ出て、しかし何事もなかったような家並み、人影はなく前の家の塀へいに防火はたきとはしごが立てかけられ、とにかく母のいる壕へと、背中の節子しゃくり上げ歩きはじめたら、角の家の二階の窓から黒煙が噴き出し、申し合せたように、それまで天井屋根裏でくすぶっていたらしい焼夷弾、いっせいに火の手上げて庭木のバチバチはぜる音、軒端のきはを走る火やら燃えながらはずれておちる雨戸、視界は暗くなりみるみる太氣は熱せられ、清太は突きとばされたように走り出し、かね

て手はずは、石屋川の堤防へ逃げるさだめだから阪神電車の高架に沿って東へ走ったが、すでに避難の人でごったがえし、大八車ひいた人や布団ふとん包みかついだ男、金切声上げて人を呼ぶ老婆、じれったくなつて海へむかい、その間にも火の粉が流れる、落下音に包まれる、三十石入りの酒樽さかだるの防水桶ぼうすいおけがこわされて水びたしになっていたり、病人を担架で運び出そうとしていたり、ある一面にまったく人がいないと思うと、通り一つ隔てて畳まで持ち出し大掃除のようなさわぎ、旧国道を抜け、せまい道を走りつづけ、すでに逃げた後なのか人っ子一人いない町のはずれに、見なれた灘五郷の黒い酒蔵、夏ならばここまで来ると、潮の香ただよい、幅五尺ばかりの蔵と蔵の間から夏の陽に輝く砂浜と、思いがけぬ高さに紺青こんじょうの海がのぞく、今はそれどころでなく、海岸へ出たところで壕一つあるわけなし只火からのがれるには水と、反射的に逃げて来たので、同じ思ひの避難民、幅五十米メートルばかりの砂浜の、漁船や網を捲まき上げる轆ろのかげに身を寄せ、清太は西へ歩いて、石屋川の川床の、昭和十三年の水害以後二段になったその上段のところどころにあるくぼみに身をかくした、おおいはないが、とにかく穴にひそんでいれば心強く、腰を下すと激しい動悸どうき、喉のどがかわき、ほとんどかえりみるゆとりもなかった節子を、おおい紐ひもから解いて抱きおろそうとすると、それだけのことで膝ひざがガクガクとくずれそうになり、だが節子は泣きもせず、ちいさなすりの防空頭巾かぶり白いシャツに頭巾と同じもんぺ赤いネルの足袋片方だけ黒塗りの大事にしていた下駄はいて、手に人形と母の古い大きな墓口がまぐちをしつかりと抱える。きな臭いにおいと、風に乗

つてすぐそのようにきこえる火事の物音、はるか西の方に移って俄か雨の如き落下音、時に怯えながら兄妹体を寄せあい、思いついて防空袋から、昨夜、母がもう残しといてもしかたないからと思ひ切つて白米だけの飯を炊き、その残り今朝の大豆入り玄米の、白黒半々にまじつた弁当ひろげれば、うつすらとすでに汗をかいていて、その白い部分を節子に食べさせる、見上げる空はオレンジ色に染まり、かつて母が、関東大震災の朝、雲が黄色くなつたといったことを思い出す。

「お母ちゃんどこにいった？」「防空壕にいてるよ、消防裏の壕は二百五十キロの直撃かて大丈夫いうとつたもん、心配ないわ」自分にいいきかせるようにいったが、時折り堤防の松並木ごしに見すかす阪神浜側の一帯、ただ真赤にゆれうごいていて、「きつと石屋川二本松のねきに来てるわ、もうちょっと休んでからいこ」あの焰の中からは逃げのびたはずと、考えをかえ、「体なんともないか節子」「下駄一つあらんようになった」「兄ちゃん買ったよ、もつとええのん」「うちもお金もつてるねん」墓口をみせ、「これあけて」頑丈な口金はずすと一銭五銭玉が三つ四つあつて、他に鹿の子のおジャミ、赤黄青のおはじき、一年前、節子はおはじきをのみこみ、その日から庭に新聞敷いてウンコをさせ、翌日夕方首尾よくあらわれたそれと同じもの。「お家焼けてしもたん？」「そうらしいわ」「どないするのん？」「お父ちゃん仇とつてくれるて」見当ちがいの答えだったが清太にもこの先どうなるかわからず、ただようやく爆音遠ざかり、やがて五分ほど夕立ちのように雨が降つて、その黒いしみをみ

ると、「ああこれが空襲の後で降るいう奴か」恐怖感ようやくうすらぎ、立ち上って海をながめると、東の間に一面黒く汚れおびただしい浮遊物が浮き沈みしている、山はそのまま、一王山の左に山火事らしく、むしろのんびり紫の煙がたなびき、「よっしゃ、おんぶし」節子を堤防にすわらせ、清太が背をむけるとのしかかってきて、逃げる時はまるで覚えなかったのにズシリと重く、草の根たよりに堤防を這いずり上る。

上ってみると御影第一第二国民学校御影公会堂がこちへ歩いてきたみたいにくみえ、酒蔵も兵隊のいたバラックも、さらに消防署松林すべて失せて阪神電車の土手がすぐそこ、国道に電車三台つながって往生しとるし、上り坂のまま焼跡は六甲山の麓まで続くようにみえ、その果ては煙にかすむ、十五、六カ所でまだ炎々と煙が噴き出し、ズシーンと不発の発火か時限爆弾か、かと思えば木枯しのような音立ててつむじ風がトタン板を宙にまき上げ、節子の背中にひしとしがみつくのがわかったから、「えらいきれいさっぱりしてもたなあ、みてみい、あれ公会堂や、兄ちゃんと雑炊食べにいったろ」話しかけても返事がない。ちよつとまってなとゲートルまき直し、堤防の上を歩き進むと、右手に三軒の焼け残り、阪神石屋川の駅は屋根の骨組だけ、その先のお宮もまっ平らになって御手洗の鉢だけある、次第に人の数が増え、皆家族連れ道ばたにへたりこんで、口ばかりいそがしくしゃべり合い、やか人を木の先にひっかけ、くすぶる石炭で湯をわかし、干藪を焼いたり、二本松は国道をさらに山へ向かった右側にあり、たどりついたものの母の姿なく、みな川床をのぞきこんでいる